

シンガポール日本人学校中学部におけるイマージョン保健体育の指導と実践

前シンガポール日本人学校中学部ウェストコースト校 教諭
北海道稚内市立稚内東中学校 教諭 河合郁儀

キーワード 在外教育施設、イマージョン教育、保健体育

赴任校の概要 2024年3月末現在

学校名・日本語：シンガポール日本人学校中学部

学校名・現地表記：The Japanese School Singapore Secondary

URL：<https://www.sjs.edu.sg/secondary/>

1 はじめに

シンガポール日本人学校中学部に2021年より派遣され、3年間イマージョン教育を保健体育の授業のなかで、指導・実践を行う機会をいただき経験することが出来た。そのなかで、イマージョン教育をどのような理念で、どのような指導体制で実際に行ったかを紹介する。

2 イマージョン教育について

(1) イマージョン教育とは

イマージョン教育 (Immersion program) とは、未習得の言語をその言語環境に置かれながら習得を目指す、言語教育の方法である。また、イマージョンとは「浸す」という意味があり、その言語の教科ではない別の教科でもその言語を利用して学習することによって、言語の習得を目指すものである。

(2) 文部科学省の指針*

文部科学省が「中学校・高等学校における英語教育の在り方に関する論点」(2014) で以下の通り示している。

- グローバル化が急速に進展する中で、子どもたちの将来の職業的・社会的な環境を考えると、外国語、特に英語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、様々な場面で必要とされることが想定され、今まで以上に、生涯にわたり、その能力の向上が課題となっている。
- 現在の学習指導要領は、英語によるコミュニケーション能力を確実に養うことを目標としているが、英語を外国語として学ぶ諸国における英語教育の状況を改めて踏まえることが必要である。その際、英語教育を通じて育成すべき資質・能力を明確化し、これらの資質・能力についての達成状況を明確化するための小・中・高を通じて一貫した目標を設定するとともに、学校において主体的に学ぶ態度を養うとともに、英語の授業以外でも英語に触れる多様な機会や環境を整えることが求められる。

特に下線部のことから、シンガポール日本人学校ではイマージョン教育を通して、英語能力の向上を図っている。

(3) 本校のイマージョン教育の実態

生徒数は各学年130～170名前後で、グローバルクラス1クラスとその他メインストリームクラスが開設されている。

① グローバルクラスについて

グローバルクラスは、入級試験が行われ、英語や数学、理科の試験に加え、作文と面接試験によって選考された生徒が在籍している。担任の先生が現地採用のローカルの先生と日本人教員で構成されており、日常的に英語を用いて生活することになる。また、数学、理科においては同じく現地採用のローカルの先生が英語で授業を行っている。さらに、メインストリームクラスとは別に週1時間「国際教養ゼミ」という授業を、現地の先生が行っている。内容としては、国際的な課題について、生徒たちが探究的に学び、議論し、提案することを、英語を通して学ぶ学習である。現地の発表会にも参加し、ローカル校との交流も盛んに実施している。

英語のレベルについては、実用英語技能検定、TOEFL、TOEIC等の英語の能力テストやCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠：Common European Framework of Reference for Languages）等の指標でもハイスコアを有している生徒が非常に多く、日常会話はもちろん、専門的な用語を交えて議論することができる生徒も数多く在籍している。

② メインストリームクラスについて

グローバルクラスとは異なり、担任の先生が日本人教員で通常の日本の学校のようにホームルーム等、日常生活を送っている。ただし、イマージョン教育は実施しており、「音楽」「美術」「保健体育」「家庭」については、ローカルの先生がイマージョン教育で実施している。こちらについては、グローバルクラスも同様である。

英語の能力については、グローバルクラスと同様に、日本の公立学校の生徒と比較すると非常に高いレベルを有している生徒が多い。

3 保健体育科におけるイマージョン教育の実態

(1) イマージョン体育の形態

本校の保健体育科では、5名の日本人教員と1名の現地採用のローカル教員（Immersion English Teacher：以下IE Teacherと略す）で構成されている。全ての授業をIE Teacherによる英語での授業ではなく、単元によって割り振りを行っている。例えば、中学校の保健体育科の標準時数では年間105時間、つまり週当たり3時間の授業を各学級実施することになるが、2コマを日本人教員による授業1コマをIE Teacherによる授業といった形で、生徒は週1度イマージョン体育を学習できるように計画がされている。それぞれの教員が単元を1つ担当し、IE Teacherも同様に各学年学級で1つの単元を展開していくことになる。

(2) イマージョン授業の計画と準備について

イマージョン授業においてはティームティーチング（以下TTと略す）を用いてIE Teacher（T1）と日本人教員（T2）が授業を実施する。日本人学校では、学習指導要領に則って、各教科の年間指導計画や各単元の指導計画が立てられ実施されているため、T1であるIE Teacherが授業を進めるにあたり、日本人教員がその計画と内容を立て、IE Teacherと打ち合わせを行って授業に臨むことになる。その際、日本人教員の英語力の心配もあると思うが、間に英語コーディネーターが入って資料と会話の翻訳を担当し、スムーズに実施することができた。

イマージョン体育の実施のうえで、IE Teacherに気をつけてもらった点は以下の2点である。

① シンプルな説明・指示・発問

通常の日本語での授業も同様だが、英語ならばなおさら長い説明・指示・発問は生徒の理解を妨げる可能性があることから、極力短く、シンプルに行うよう心掛けた。

② 明確なToday's goalとKey wordの設定

日本でも行われていることだが学習目標「Today's goal」をホワイトボード等に明示し、可視化を図ることで生徒に意識付けさせた。また、授業の核となる、それぞれの単元や1コマの授業における見方・考え方を「Key word」として単語で提示し、授業中に困り感や停滞を感じた個やグループに対して、思考を戻す役割にした。

(3) 授業の実際について

上述したように、TTの形態で授業が進められていく。生徒の実態としては集団として高いレベルの英語力を有してはいるが、編入したばかりやそもそも英語に不安を抱える生徒も一定数在籍しているため、T2や周りの生徒がその生徒をサポートしていく必要がある。ただし、技能系教科ということもあって端的な説明や指示をすることで、ある程度生徒も理解しながら授業に参加できていたように感じる。

また、生徒がわからないことがあると、IE Teacherに英語で質問したりするが、英語が苦手な生徒も単語やジェスチャーを用いてコミュニケーションを交わそうとする努力が見られ、必要感がある言語環境として、イマージョン教育の価値を感じることができた。

さらに、授業後のリフレクションも英語の記述で行っており、IE Teacherが用意したリフレクションシートに生徒自ら自身の学習状況を振り返る場を設定し、IE Teacherがコメントをして生徒に返している。

(4) 評価について

学習指導要領に則って各教科の評価も実施されているが、IE Teacherにも単元の各観点の評価項目に応じて評価を付けている。その際、主観が入らないようにルーブリックを共有して評価の内容がぶれないように打ち合わせを行った。

4 おわりに

イマージョン教育を試行錯誤のうえ実践するなかで、一般的な日本の学校以上に恵まれた環境の中で英語と向き合うことができるこのシステムが私自身生徒をうらやましく感じた。その中で最大限その効果を発揮すべく、IE Teacherと連携して授業づくりをする楽しさや大変さを痛感したが、私にとってかけがえのない経験にすることができた。

シンガポール日本人学校中学部へ赴任が決まり、イマージョン教育を実施している学校という情報を聞き、自身の英語力に不安を抱えたまま赴任することとなったが、様々な先生方や生徒に支えられて実践することができた実感している。今後、派遣される先生や、他の日本人学校、国内の先生方の一助になれば望外の喜びである。

引用文献

※文部科学省HP政策・審議会：「英語教育の在り方に関する有識者会議（第5回）配布資料」

【資料2-1】中学校、高等学校における英語教育の在り方に関する論点 1目的（必要性）より引用

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryo/attach/1349083.htm